

● シリーズ 私の見た日本 Vol.183

Lights in Japan

林 映嵐 (リン エイラン)

中華民国台北市出身。
2005年台湾淡江大学建築学科卒業。2006～2010年 chroma33-architectural lighting design勤務。2011年京都大学大学院工学研究科建築学専攻にて研究生。2012～2018年高松伸建築設計事務所。現在、佐藤総合計画に勤務。



私は台湾の淡江大学建築学科を卒業後、照明デザイン会社で照明デザインに携わった後、再び建築設計の世界に戻りました。異業種の経験を経たことで、建物を見るときの着眼点が少しほかの人と異なるのではないかと考えています。また、これまで日本と台湾、中国で仕事をしてきましたが、それらの文化の違いも感じてきました。

京都の「侘び寂び」

日本に来て、最初に住んだのは京都でした。京都という都市の第一印象は、新旧の建築がうまく混在しているという点でした。千年の歴史を持つ寺院や古い木造平屋に、新築のRC建築が隣り合っているのに、なぜか秩序が失われていません。京都の景観ガイドラインは建物の高さを一定に抑えることで都市全体のスカイラインをコントロールしています。これは都市人口が集中し、容積率と建蔽率を目いっぱい活用している台湾では見られない特殊な光景です。

京都に住んで勉強と仕事をするなかで、夜の京都に対して独特な印象を感じていました。京都の景観条例は非常に厳格で、すべての店舗の看板の大きさと色について、かなり禁欲的とも言える制限があります。台湾のさまざまな店舗、なかでも不夜城のと言われる夜市などと比較すると、京都の照明は午後8時以降に「絶滅」と言っても過言ではないほどで、夜の訪れを明確に感じることができません。このような文化的、地域的差異のためか、世界遺産の古都のなかで、学生時代に読んだ谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』を思い出して、より一層理解を深めることができました。

京都の景観ガイドラインでは看板照明に対して特に明確な制限があるうえ、日本はプライバシーに対する意識が強いいため、一般住宅では光透過率の低いカーテンによって中に人がいるかどうかはほとんど確認できません。

オフィスでも、一般的なガラスカーテンウォールだと熱線反射ガラスを採用しているため、昼間は太陽の反射で室内がよく見えません。反対に、夜になると室内の光は目立つので、カーテンやブラインドを引きます。そのため、都市の光は夜の京都ではとりわけ弱いように感じます。一方、建物のライトアップが目立つようになりました。例えば、京都駅の近くにある東寺の五重塔のライトアップは、最低限の照明によって建物の高さや軒の細部が強調され、昼間、太陽光の下で見るとに比べ、建物の表情も異なって見えます。

「神は細部に宿る」という言葉の通り、建築の美しさはディテールに現れますが、それには光と影を適切にコントロールする設計手法が必要だと考えます。京都でも日中は都市環境のなかに情報があふれていて、歴史ある建物を訪れる場合を除けば、「侘び寂び」という日本特有の美学があまり感じられないように思います。一方、夜になるとさまざまな照明が歴史ある街並みの風情を醸し出すように、京都の街を照らしています。文明の産物である現代の照明は、都市が発達するにつれて数が増えてさらに明るくなり、いわゆる「光害」を生み出すこともあります。京都では細心の注意を払って照明がコントロールされるように思われます。そうした心掛けによって「古都」の称号が守られていることは素晴らしいことだと思います。

夜のお祭り

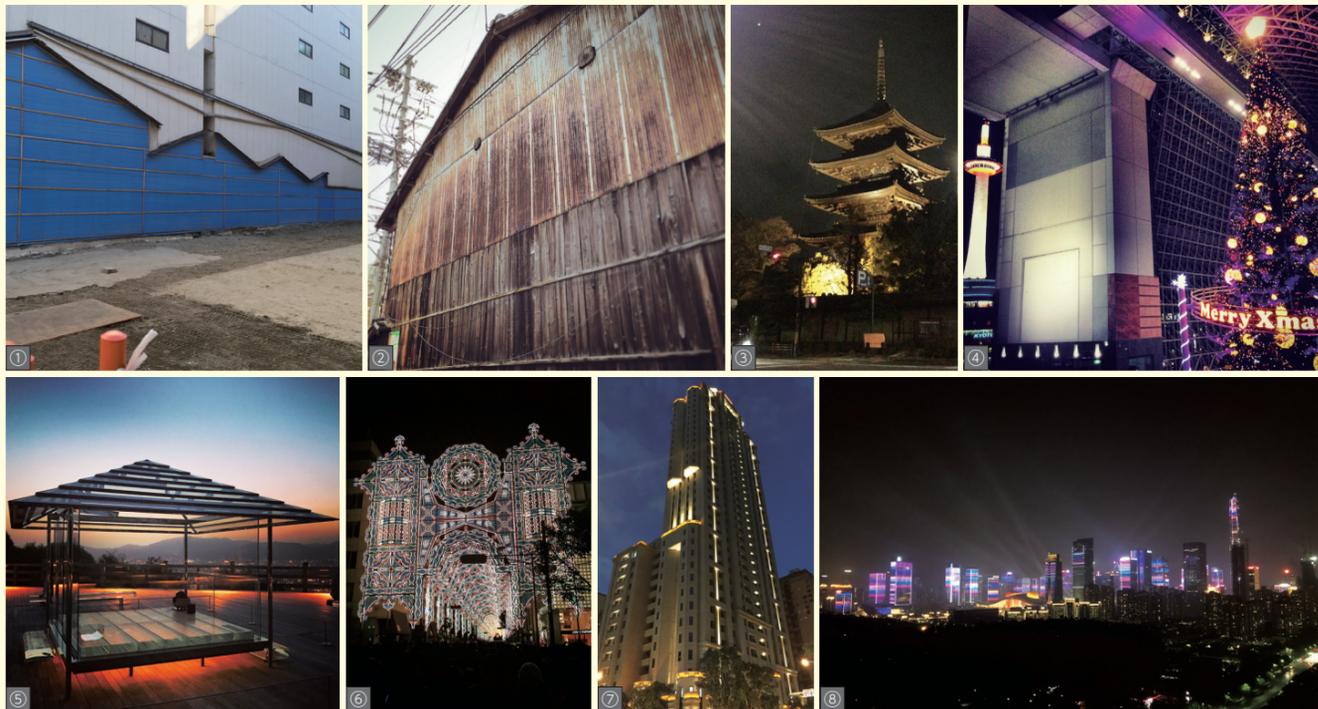
京都でも、普段の夜は天気良ければ星空を眺めることができるかもしれませんが、ある季節になると観光スポットではライトアップやイルミネーションなどが行われます。なかでも夜間特別拝観や紅葉のライトアップは特別なもので、コントロールされた照明の下で強調したい部分を自由に強調することができます。植物の色は照明に照らされることで明るく、またコントラストが高くなり、例えば

紅葉は燃え立つ炎のようになります。昼は質素な木造のお寺が巧みなライトアップによってあでやかな姿に変貌を遂げます。

2015年に將軍塚青龍殿の夜間拝観を訪れた際、庭園の紅葉に加えて、吉岡徳仁が設計したガラス張りの茶室・光庵が期間限定で特別に展示されていました。金属の支柱以外はガラスでできた四角形の茶室が、青龍殿の大舞台の真ん中に置かれていました。夕方になると、大舞台の手すりに最小限の照明が灯されます。暮れゆく京都の空のわずかな残照や街の灯りが、自然に、そして複雑にガラスに反射して、茶室自体が周囲の景色に溶け込み、有るか無きかのような雰囲気を与えているのがとても印象に残っています。

もう一つ印象に残っているのは、神戸ルミナリエでした。1995年の阪神・淡路大震災の犠牲者に哀悼の意を表すとともに、神戸の観光事業の復興を図るため、震災のあった年の12月から毎年開催されているイルミネーションイベントで、毎年約300万人が訪れるそうです。等間隔に置かれた光のアーチがトンネルを形づくっています。毎年のテーマに合わせてデザインも変わり、色の違う電球を配置します。技術の進歩と省エネなど環境配慮の側面から、光源は初期の白熱電球からLED電球を使うようになりました。トンネルのような環はデザイナーの手配の下で、入り口から見ると思いがけない壮観さと迫力があります。非常に成功していて、個人的には意義深い活動だと思います。

多くの場合、日本の街並みはきれいで理想的な都市のイメージですが、時として、それが氷のように冷たくて生命のない、無機質な感じを与えることがあります。特に、夜、人気がない状態だと、そうした雰囲気を感じることが多いようです。しかし、先に挙げたような独特な夜間イベントにより、伝統的なお祭りのように、自然の風景を夜に蘇らせ、都市の静かな夜に昼間の情熱を取り戻しているように思います。



①京都にある新旧の建物の面白い関係。古い建物が新しい建物に痕跡を残している ②京都の路地で見つけた風景。トタンと木造の壁にも「侘び寂び」感が感じられる ③東寺の五重塔の夜間ライトアップ ④京都駅を挟んでクリスマスツリーと京都タワーが見える ⑤吉岡徳仁が設計したガラス張りの茶室・光庵 ⑥2011年の神戸ルミナリエ ⑦台湾時代にファサードの照明計画を担当したマンション ⑧深圳の中心部で見たビル群の照明シンクロ演出

光の都市

京都に住んだ後、仕事場を変えて東京にきました。世界有数の巨大都市だけあって、東京は京都や故郷の台北とは違った様相を持っています。そう変わらない部分があることもわかりました。例えば、人口を比較すると東京は現在約1,400万人で、台北は約260万人と、5倍以上も違いますが、地域ごとの人口密度から見れば人口が最も密集している地域の違いは大きくありません。商業活動が盛んなにぎやかなエリアでは、夜間の照明はかなり明るく、特に重要な施設や象徴的な施設では特別な照明計画が行われ、それぞれが特徴的な表情を持っています。それは東京でも台北でもあまり違いはないようです。

それに対して、一般住宅のような建物に対するファサードの照明デザインにおいては違いを感じます。東京も含む日本では外観を照らすような照明はあまり一般的ではないようです。プライバシーやセキュリティの問題もあると思いますが、ごく少数のタワーマンションのようなものを除けば、一般的な住宅は似たような造型でそれぞれの住戸のベランダには照明がないことが多いようです。しかし、建物の裏に回れば対照的に煌々と照らされた廊下が積み重なっています。都心から遠ざか

るほど、そうした照明の単一化が進むようです。概して、日本では商業地域であるか住宅街であるかに関わらず、照明の明暗と色との対比が強いように感じられます。

一方、台北の集合住宅では、住民が夜にベランダを利用するのに便利のように、ベランダごとに独立した天井灯が設置されています。日本ではプライバシーを重視するためか、夜はカーテンを引いてベランダは暗いままですが、台北では住民それぞれが思い思いに色や明るさが異なるベランダ照明を灯すので、建築のファサードが少し混乱したような表情になっていることがよくあります。さらに、台北に限らず、台湾で建てられる集合住宅の多くは分譲しやすいように屋根の形を特別にデザインしたり、外壁をさまざまに照らしてみたりして、オリジナリティを強調しています。したがって、日本と台湾の都市の夜の表情はかなり違った個性を持っています。

現在、仕事の関係で中国に行く機会ができました。現在も急速な発展を続けている深圳市で不思議な光景を見ました。都心の高層ビルの多くは建物の形に合わせて独自の照明計画が行われていますが、特定の時間に限り、中心部のビルの外壁が一つの巨大なスクリーンへと変わるのです。たくさんの建物の外壁に連続した人物や文字列などの映像が映し出

され、一瞬にして都市全体が一つになるような強烈な印象を受けました。これを実現するには、外壁に埋め込まれたLEDのような光源や、演出内容を全体的にコントロールできるシステムなどの仕組みに加え、権限が必要になるように思います。それを実現できるのは中国という国だからなのかもしれません。

異なる国、異なる都市のなかで、それぞれの都市計画では機能的なゾーニング、交通動線、景観の保存、あるいは空路の規制などが進められると思いますが、夜間の照明の個性もそれぞれの都市に違った表情を与えています。照明デザインは都市の風格を伝えるだけではなく、その地域特有の文化を表すものであり、建築設計に取り組む際に検討しなければならない重要な課題だと思います。